



TITLE:

『三野人物考 和合編』--順序なき
人物誌の「謎」と「真相」

AUTHOR(S):

ファンスターンパール, ニールス

CITATION:

ファンスターンパール, ニールス. 『三野人物考 和合編』--順序なき
人物誌の「謎」と「真相」. 教育史フォーラム 2017, 12: 89-105

ISSUE DATE:

2017-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/235479>

RIGHT:

発行元の許可を得て登録しています。; 許諾条件により本文は2019年
6月1日に公開します。

【資料紹介】

『三野人物考 和合編』
—順序なき人名録の「謎」と「真相」—ファンステーンパール ニールス
(京都大学)

本稿では、河瀬友山著『三野人物考 和合編』(1835年序)という人名録とその出版状況を紹介し、部分的に翻刻することで、以下の二つを目的とする。第一に、資料調査で新たに発見した、この史料の増版の内容を公表することで、人名録ジャンルに関する研究の便を図る。第二に、この史料に潜んでいる、「順序」をめぐる「謎」を指摘し、それを解明する仮説を提供する。結論として、本史料の増版に確認できる所収人物の掲載順番の異同が、読者を得るためにもっとも苦勞する私家版ならではの工夫として発生したと論じる。

はじめに

「順序」とは、価値観が際立って反映される文化史的問題である。もちろん、我々が四次元という狭い時空に適応した脳をもっている以上、物事を並べて思考せざるを得ない状況に置かれている。人間の脳は現象に対しパターンを探し求める機械であるため、たとえランダムな順序にも、かならず恣意的な意味を見出そうとしてしまう。順序をつけずに生きる選択肢がもとより我らにない。そうした点で、順序に人間の価値観が凝縮されているともいえる。

それにもかかわらず、順序の問題に断片的に触れることがあったとしても、それを体系的に検討しようとする歴史研究は皆無といってよい。たとえば、日本近世史にそっていえば、身分制の存在だけはよく指摘され、それぞれの身分の実態に関する検討は近年数多く発表されているが、それとは別にどのような順序体系(茶室の上座、位牌の並べ方、文庫の分類、ライフコースの段階など)が併存し、それらの体系はどのように絡みあっていたのか、ということは、まったく注目されていない。

その点に関してとくに気になるのは、人名録というジャンルの可能性である。人名録はもちろん歴史人物の生年月日や評伝を探るため、いわば参考書として多く利用されているが、それがジャンルとして、そして順序体系を反映するものとして、どのような意義をもつかについては関心が注がれていない。しかし、少しでも目をむけると、さまざまな興味深い疑問点が現れる。その一例として、本稿は、『三野人物考 和合編』(天保六、

教育史フォーラム 第 12 号

1835 年序。後、『和合編』と略す) という人名録を紹介することにより、近世における順序の意義と、それを追及するための人名録の資料的な価値を示したい。

1. 『三野人物考 和合編』の「謎」－ 三つの特徴からして

『和合編』というのは、河瀬友山という人物の筆による、「三野人物考」という人名録と、「孝養門」という教訓書を合わせた書物である。後者の紹介は後述するが、前者は美濃国の「芸能道術に秀達」した人物を列举し、その芸・流派・姓名・号・住居などを記している著作である（【図 I】¹⁾）。決して著名な人名録ではないが、近世の芸術・学問に関わっている人々の重要な情報を提供しているため、たびたび言及され、複製版と翻刻も出版されている²⁾。

図 I 『和合編』の名簿

医 師	乱 舞	医 師	俳 学	閑 流	經 學	蹴 鞠	画 工
無内外科 山縣郡三輪人	能鼓 墨腰取人	蘭舞學 方縣郡小倉人	法書能辨人 岐阜西野	筆術 廣江永貞門	号鼓齋 安郡唐郷人	高田窪翁男	加納人
後藤養元	加野平作	高井松亭	松橋願誓寺	糸津弥五郎	菱田清治	日比野十造	松波文右衛門

しかし、やはりほかの人名録と同様に、本格的に目を向けられることはなく、その性格についての指摘は次の二点にとどまってしまっている。第一に、複製版が所収されている『近世人名録集成』の解題に、本著の特徴としては「当時現存者だけでなく物故した諸家や美濃出身の人物をも収録」したことと、「版型が半紙本である」ことが指摘されている³⁾。第二に、中野三敏氏が、『和合編』二本を照らし合わせて、一本には人物が 8 人増加されたこと、三カ所において改刻されたことを報告した⁴⁾。

ファンステーンパール：『三野人物考 和合編』

この二点の指摘自体に異論はないが、筆者からみれば、『和合編』にはもっとも興味深い「謎」が潜んでいるのである。以下、その「謎」を構成する、本著の三つの特徴を取り上げる。

① 増版に異同が多いこと

中野氏は『和合編』の二本しか比較できなかったため、その僅かな異同を「凡ての人物志に通じるもの」、すなわち珍しくもない普遍的なものとして片づけた。しかし、筆者が8本の版本を調べた結果、むしろ、異同が極めて多いことが判明した。版本はすべてどこかで異なり、まったく同じものは確認できなかったのである（【表 I】）⁵。

表I 『和合編』版本一覧

	所蔵先	文庫	請求番号	所収人数	人物考 跋	孝養門 序
A	岐阜県立図書館		281カ	96	無	無
B	九州大学	相見	W/79	96	有	無
C	都立中央図書館	加賀	1909	96	有	無
D	今治市河野美術館		458-1907	104	有	無
E	大阪市立大学	森	713	104	有	無
F	国会図書館	白井	特1-2276	200	有	無
G	国会図書館		211-81	200	有	無
H	UCバークレー校	三井	1-3-976/18	200	有	有

その異同は五種類に分けられる。

第一に、所収人物の情報に関する改刻。これは誤りを直したり、アップデートして改めたりしたものであろう⁶。

第二に、所収人物を差し替えた改刻。これは何らかの事情（死亡や移動など）によって立場に変化のあったに人の位置を、他人に譲った措置であろう⁷。

第三に、所収人物の増加。これは凡例どおりに「此編遺漏するところのものは不日編を追って尽く之を挙げん」という方針に沿ったものであろう。

第四に、序・跋の有無。各版には「三野人物考」の序が付いているが、その跋と、「孝養門」の序が必ずしもついていない。

第五に、丁順の変更。この点に関して、次節で詳述する。

最後の点を除いて、以上の異同自体は、さほど珍しいものではないかもしれない。しかし、それらが相まって、『和合編』のような出版状況、つまり原本8本中、その全てに異同が認められる状況を生み出していることが異例というべきであろう。特に、美濃国を対象とする、極めてローカルな人名録に何故これだけ頻繁に手入れする必要があったのか、説明を要する問題である。

② 丁順が不定であること

『和合編』の版本において、丁順（すなわちページ順）における異同は、版本 8 本中 7 本にも見られるので、特筆すべき現象としてここで詳しくみでみる。

増加版ごとに、筆者が【A】【D】【F】を底本に各丁に番号を施し、増版における順番異同状況を【表 II】としてまとめた。また、各増加版において新たに追加された丁をグレーで網掛けした。

表II 「三野人物考」丁順一覽

A	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12													
B	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12													
C	8	9	10	3	4	5	6	2	7	1	11	12													
D	6	12	5	9	4	3	11	1	13	8	2	7	10												
E	2	7	8	10	1	6	12	13	9	5	3	4	11												
F	4	3	5	8	7	10	9	6	12	1	2	11	14	13	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
G	8	3	4	5	6	7	9	10	12	2	11	16	1	14	17	18	19	20	25	13	15	24	22	21	23
H	13	15	12	16	11	22	21	25	14	20	18	24	2	19	5	1	9	6	3	23	4	10	7	17	8

この丁順異同は何を意味するかを検討するにあたって、以下二つの前提を考慮する必要がある。

第一に、この異同は、製本ミスのような「まぐれ」ではなく、意図的に実施されたということ。そういえるのは、「三野人物考」には、丁数（すなわちページ番号）が付けられていないからである。「孝養門」には付いているので、「三野人物考」だけに付け忘れたとは考えがたいし、万が一初版において忘れたとしても、増版において付加されたはずである。丁数のないことと、それ故に可能となる丁順の異同は、意図的な措置であると結論せざるを得ない。

第二に、丁順は不定であるが、ランダムではないこと。例えば、【C】を【B】と比べれば、確かに丁順が違うのだが、11 丁と 12 丁が同じく最後の位置を占めているし、また最初にある「8、9、10」丁の三枚とそれに続く「3、4、5、6」丁の四枚はいずれも【B】と同じ順番に並べられている。【E】を【D】と比較すると、【D】における「6、12、5、9、4、3、11」丁の七枚が全体の前半となり、同じ七枚が【E】において、「6、12、13、9、5、3、4、11」丁のように、13 丁を挿入した上、後半部分をなしている。また、【F】と【G】の両方にみえる、以前の版にあった「1~13」丁と、今回の増加版に新たに加えられた「14~25」丁が、かなりの程度で分離されている。これらの現象は、ランダムに生じる確率は極めて低いといえよう。要は、丁順が不定ではあるが、なんらかの法則が働いているようである。

では、この順番の背景に潜んでいる法則が何であるのかという問題は、きわめて重大な意義を持つものである。というのも、丁順は、人物の掲載順番をも意味するので、それが軽々しく取り扱われるはずがない。実際、掲載順番の法則に関する誤解を恐れて、大体の人名録は凡例において何らかの基準を明記している。たとえば、いろは順を採用した『筆道師家人名録』（1821年刊）は「諸家の排列順次は優劣を論せず。但聞識に従ひ筆札を

ファンステーンパール：『三野人物考 和合編』

取り是を定む又伊呂波を以てするは其姓名の搜索を便とするのみ」とし⁸、方向別で記している『良医名鑑』（1713年刊）は「医名ノ序次位階年齒ニ依ラズ、一ニ方処ヲ以テス。皇都ノ俗北ヲ以テ上京ト称ス故ニ、北ニ始テ南ニ至ル。其ノ東西相ヒ並ル者ハ東ヲ以テ先ト為ス。然ドモ禁裏院中ノ御用ニ関カルノ人ハ別ニ上ニ列ヌ」と断っている⁹。

実は、『和合編』もこれらの前例に従って、所収人物の掲載順番を「凡例」で説明している。「凡そ、此編集録するところの人物は、其芸術の甲乙人品の貴賤を問はず、其声名を聞に從て之を録する耳」と、掲載順番が人物に関する情報の入手順を表しているという。だが、上述の丁順異同状況に照らすと、この主張は明らかな「嘘」だと言わざるを得ない。そうしてまで隠蔽しようとした、この丁順の実態こそ、解明を要する謎である。

③ 人名録と教訓書を合わせたこと

最後に、着目すべきなのは、『和合編』という著が「三野人物考」という人名録と「孝養門」という教訓書という異なる性質なものから構成されていることである。意外に先行研究はこの事実に目を向けることはなかった。むしろ、『近世人名録集成』における複製版では『和合編』全体が所収されているにも関わらず、それをまとめて「三野人物考」の題をもって掲載している。また、『岐阜県史』における翻刻は「三野人物考」にだけ及び、「孝養門」に入るはずのところで、「以下道話略」として省かれている。要は、『和合編』を取りあげている先行研究は「三野人物考」にだけ着目し、「孝養門」の存在を「おまけ」として軽視してきたのである。

しかし、人名録と教訓書を合わせた出版物は、管見のかぎり、この『和合編』しか存在しないため、その分、積極的な意味が潜んでいるはずである。『和合編』によれば、その意味は両著が二つとも「孝」を課題としていることにある¹⁰。というのも、「三野人物考」は単なる人名録だけでなく、その編纂意図は「其孝名を書集る人物考の名録ハ、名利名聞を好む人物にあらず。代々の血流を明に孝名を後世に残すハ、先祖への孝礼なり」という。つまり、この人名録は掲載人物の「孝名」、すなわち親孝行の名声を残すためでもある。そして、それに「孝」をめぐる教訓書となる「孝養門」を加えた理由として、「三野人物考」の跋文では「幼より孝名に至んが為に児童毎に信祭を感じるも孝祖聖廟の迹を慕ひ孝学の広く行はん事を願ふが故に附録して後へに孝養門を積し置ぬ」と、つまり親孝行の大切さをさらに分かり易く説明するためだと挙げている。

このような説明では、この両著を合わせた意味合が理解できるが、厳密に言えば、少々換言が必要である。というのも、実は『和合編』が天保六年に発行される三年前に、すでに『孝養門』が単著として出版されていたからである。ならば、「三野人物考」に「孝養門」が附録として追加されたというよりも、むしろ、「孝養門」に「三野人物考」が追加されたという理解の方が妥当である¹¹。そう考えると、一つの疑問がわいてくる。もし、著者の意図が「孝」の大切さを伝えることにあるとするならば、そして、著者がその旨をすでに『孝養門』で分かり易く述べたのであれば、なぜそれにあえて「三野人物考」を加える

ファンステーンパール：『三野人物考 和合編』

施印については、ほぼ検討されていないジャンルとして不明なことがまだ多いが、その特徴の一つは、自身が重要であるとするメッセージを、私費を投じてでも世に届けたいという強い信念である。志こそ高いものではあるが、商業書肆による出版物でないかぎり、その勢いは金と読者、という二つのボトルネックによって制限されている。前者の「金」は、施印を出版できる資本をいかに募るかという問題を意味する。後者の「読者」は、書肆で販売しない以上、施印をどのような方法で読者に届けるか、という困難を指す¹³。

以上の施印の特徴は『孝養門』にも当てはまったはずである。「孝釈師」として、「孝」の普及に日々努力した河瀬友山にとっては、『孝養門』は自分の信念が凝縮された著作であったに違いない。と同時に、『孝養門』を世に広めることとなると、それをどの資金で、そして具体的に誰に、どのように届けばよいのか、というロジステック的な壁にぶつかったはずである。もちろん、孝談を聞きにくる聴衆に配布する方法はあるが、彼たちには孝への関心がすでに備わっているはずなので、良き理解者の拡大にはつながりにくい。むしろ、自分のネットワーク圏外の人々をいかに巻き込むかが課題であった。

上記の理由から、『和合編』の出版は『孝養門』という施印の普及を阻害する、「読者」と「金」の問題を乗り越えるための戦略として発想されたと考えられる。読者に関していえば、『孝養門』に「三野人物考」を加えることによって、孝談を自分から求める人々だけでなく、学芸に関心のある人々も新たなオーディエンスとして開拓することが可能となった。

読者のボトルネックをこのようにくくりぬけたが、「金」の問題が一層深まった。というのも、『孝養門』はわずか8丁の著として、自費の負担はさほど重くないが、『和合編』の丁数は96人版でもその3倍、200人版ならば4倍となるので、全額負担するのは難しくなる。その問題をどう解決したかという点、次のように考えられる。出版のために投資してくれる人を、「三野人物考」に掲載した上、丁順、転じて人物の掲載順番を投資者本人に決めてもらう戦略にでたのではないであろうか。『和合編』の序文には、本著が「名利名聞を好む人物」を記録しているわけではないことを謳っているが、むしろ、『和合編』は「名利名聞を好む」人間の本質をくすぐった募金活動を踏まえてできたのではないだろうか。もちろん、それぞれの投資者は自分の「名利名聞を好む」ところを披露したくはないので、それを隠蔽するために、凡例では人物の掲載順番は「其声名を聞に従」ったものであるという「嘘」が設けられたと考える。

以上の仮説をもって、『和合編』の特徴に現れた「謎」が説明可能となること自体意外に、それを裏付ける決定的な証拠は、残念ながら現時点はまだない。状況証拠は久世家と河瀬家の掲載をめぐる、次の二点のみである。

まず、久世家について。久世家は大垣の商人かつ庄屋の家である。石門心学の深造舎の舎主として、久世順矣は当初から『和合編』に所収されているが、【D】以降、その子となる「久世吉良助」（御言）と、甥にあたる「久世作兵衛」（光苞）とが差し替え人物として、追加されたのである¹⁴。そこで興味深いのは、この追加分二人が【D】において占める位置

教育史フォーラム 第 12 号

である。後者の名前が名簿の冒頭に、前者の名前は最後から二番目にある。その位置は、最初とほぼ最後で、極端的に離れているように見えるが、実はその反対である。というのも、近世において、俳諧や出版物の奥付けにある本屋の力関係を表すには、一番重要なものを最後に、二番目を最初に、三番目は最後から二番目、四番目は最初から二番目と、中央に近づくにつれて地位が低くなる、という格付けの法則が存在したからである¹⁵。この法則に従うと、この久世家のいとこたちは結局、二番目と三番目を占めることとなる。差し替え人物として、ちょうど同じ時期に、この奇妙な位置の配置された背景に、久世家の希望があったと推測するのは難しくない。

次に、河瀬家について着目すべき点は二つある。まず、『和合編』は河瀬友山の手による編纂にもかかわらず、河瀬家の人物を掲載するのを最初に遠慮したこと。二つ目の増加版、【E】においてはじめて、河瀬家の人物、友山の二男「河瀬東八郎」(友明)と、その息子「河瀬三郎助」(友継)(すなわち友山の孫)が追加されたのである。もう一つ、河瀬家の人物の掲載位置が低い位置を占めたこと。【表Ⅱ】の丁順でいえば、全 25 丁中、9 丁、13 丁、14 丁という書籍の中央あたり、すなわち地位の低い場所に配置されている。この二点を考えると、『和合編』における河瀬家の立ち位置は、謙遜的な意味合いを込めた、友山の意図的な工夫によるもののようにも見える。

あらためて主張するが、以上の二点は状況証拠にすぎない。これを単なる偶然としてみなす見解もあり、筆者の脳が、パターンを探し求める機械として、この偶然にむりやり意味を与えようとしている可能性も大いにある。そのため、現時点では、以上の説明はあくまでも仮説であると断りたい。ただし、「謎」の「真相」を今回は断言できないにしても、「謎」自体が存在することには変わりないので、ぜひ読者の力を借りて、上述よりも説得力のある説を考案していただければ幸いである。

3. 「三野人物考」の翻刻

『和合編』は、もとより「三野人物考」と「孝養門」からなるが、枚数の関係と、後者がもとより単著としても発行されたため、「孝養門」の詳細を別の機会に取り上げることとする。したがって、本稿においては、「三野人物考」の序文、凡例、本文、跋文のみを翻刻する。また本文に関して、読者の便をはかり、表に整理した。

翻刻凡例

- 一、底本に国会図書館所蔵、白井文庫(特 1-2276)の版を使った。
- 一、旧字体は新字体に、異体字は通行字体に、誤字は正字に改めた。
- 一、適宜、句読点や中黒、カギカッコを施した。
- 一、漢文的な表現は、書き下した。

ファンステーンパール：『三野人物考 和合編』

一、本文の表の列の項目として採用した「姓」「名」「号」「住居」「芸」「流派」は筆者が便宜のために設けたもので、原史料にはない。そのため、項目の内容から外れた記述も所々見られる。

【序】

聞ざる事ハ孝学にならずと。聞くべきハ孝積、行ふべきハ孝道、揚るべきハ孝名なりと。其の孝名を書集る「人物考」の名録ハ、名利名聞を好む人物にあらず。代々の血流を明に、孝名を後世に残すハ先祖への孝礼なり。相伝の芸能道術に秀達し、国名を発するハ師兄への義孝なり。三野の名花空しく広原に散失んことを惜ミ、拙き筆を染て墨迹を残すも、広く孝名に進むの便りにも哉と。予が孝心の切なる余り、頼まぬ世話を書集る。仁の実ハ父母に親しミ、義の実ハ師兄を慕ふと。其味ひを感孝せし仁義全き「人物考」と是非の評ハ風雅に譲り賜へ。

【凡例】

一 凡ソ、此編集録スルトコロノ人物ハ、其芸術ノ甲乙、人品ノ貴賤ヲ問ハズ、其声名ヲ聞ニ従テ之ヲ録スル耳。故ニ此編ノ次第ヲ以テ、芸術ノ甲乙、人品ノ貴賤ヲ論ゼバ、大イニ其实ニ違ハン。又其名字・称号等ノ如キモ一々其人ニ就テコレヲ正サズ。故ニ之ヲ録スルニ多クハ号ヲ以テシ、或ハ又称ヲ以テス。名字・別号等ノ如キハ事繁キヲ以テコレヲ略ス。

一 吾州、人物ノ多キ、名家ノ夥シキ、千百ヲ以テ数フベカラズ。故ニ此ニ載セザルトコロノ名家甚多キニ居ス。コレ此一冊子ヲ以テ尽ク之ヲ網羅スルコト能ハザル所以ナリ。故ニ此編遺漏スルトコロノモノハ不日編ヲ追ツテ尽ク之ヲ挙ゲン。

一 已ニ鬼録ニ上ルモノト雖モ、近代有名ノ士ハ尽ク之ヲ載ス。又出テ他邦ニ在ルモノト雖モ、吾州ニ産スルモノハ尽ク之ヲ載ス。此「三野人物考」タル所以ナリ。

天保六年乙未春

清水堂主人友山謹述

【跋】

孝ハ諸道の要、善行の根元たり。親師として弟子を教し、流伝の譲りを受継、行道に発達し、名を孝天に耀さんとならば、先「人物考」に列し、孝名を子孫に譲ること泰平の功し、親師豈是を喜歡バざらん哉。幼より孝名に至んが為に、児童毎に信祭を感じるも、孝祖聖廟の迹を慕ひ、孝学の広く行はれん事を願ふが故に、附録して後へに「孝養門」を積し置ぬ。諸君子誹謗を止よ。児童にも亦「人物考」の感通安から示んが為なりき。

【本文】

教育史フォーラム 第12号

	姓	名	号	住居	芸	流派
1	渋谷	市三郎	七段免許	高田人	将棋	
2	川内	基左衛門	号当々	高須藩人	儒学	
3	江馬姓	細香	能画	大垣江馬春齡蘭斎女	詩文・書	
4	大野	周輔	号敬斎	高須人	書家	
5	柳川	新十郎	号詩禅	安八郡曾根人	詩学	
6	山岡	宗有	号徹斎	笠松在奈良都住	茶人	松尾流
7	栢刈	藤太夫	号蛙亭	高田人	詩学	
8	久世	順矣	号深造舎	大垣人久世友甫男	心学	
9	羽淵	中務	号清漳堂	関人	礼法・筆道	吉良流 御家流
10	村瀬	平治郎	号藤城	上有知人	詩文	
11	光明寺	春霞	能法話童子	山県郡石原	書画	幼ニシテ
12	塚原	玄成	兼内外号橋井堂	加茂郡市平賀人	心学・医師	
13	立木	頼母		芝北方人	蹴鞠	
14	村瀬	太郎九	号秋水	上有知人	書画	
15	天野	玄泰	兼内外科	武儀郡下有知人	医師	
16	塚原	玄仲	兼内外科腹診家	塚原玄泰成男	医師	
17	飯沼	徹因庵	産科号藍涯	不破郡表佐人	医師	
18	吐龍坊	里朝	号紅葉庵	飯沼徹因庵隠居	医師・誹諧	
19	児玉	孫左衛門	好書号範圃	多芸郡根古地人	囲碁	
20	日比野	亮	号鶴翁	高田人	画工	
21	松波	文右衛門	号鶴山	加納人	画工	
22	日比野	十造		高田鶴翁男	蹴鞠	
23	菱田	清治	号毅斎	大垣人	經学	
24	稲津	弥五郎	広江永貞門	安八郡曾根人	算術	関流
25	武山	巖	内科	岐阜人	医師	
26	中川	少将	眼科兼内外	岐阜人	医師	
27	小野	周輔	儒医	岐阜南口御園人	礼法	吉良流
28	関谷	隆輔	蘭兼学	本巢郡本田人	医師	
29	入野	関清	外科	中嶋郡府橋人	医師	
30	柴田	見順	中風科	中嶋郡狐穴人	医師	
31	菊道人	三亀		岐阜人	菊園	
32	土岐	基三郎	名府道楽斎徳山門人	岐阜人	軍記録醫師	
33	大塚	南窓		笠松人	画者	

ファンステーンパール：『三野人物考 和合編』

34	安乗院	定閑		岐阜人	蹴鞠	
35	百福堂	天年	平安住八万塔行者	大野郡呂久産	篆刻・書画	
36	福寿窓	真倉		笠松人	狂歌	
37	馬嶋	大智坊	眼科	岐阜人	医師	
38	伊藤	蜂三郎	名府	可兒郡兼山人	囲碁	
39	丹羽	氏祐	号蓬原舎	岐阜人	心学	
40	北川	俊随	内科	加納藩人	医師	
41	飯沼	龍夫	蘭学	大垣人	医師	
42	覚明寺	智幢	号松蔭	海西郡須脇	仏学	
43	三ツ木	主税	内科号台寿	方県郡小倉人	医師	
44	児嶋	百一	能琴	大野郡更地人	学者	
45	江馬	春齡	蘭学	大垣藩人	医師	
46	宮田	平作		加納人	詩学	
47	久世	吉良助	富樫広藤門人	大垣人	皇国学	御言
48	福田	理太郎		本巢郡真桑人	囲碁	
49	渋谷	与八	家本日本惣目代職能花図	高田人花相翁	花道	桜亭一々
50	吉田	長右衛門	豊陽岐守文秋学号利充	高須人	歌道・笙	三歳引盲人成 本居春庭学
51	神田	充	号柳溪	不破郡岩手人	詩文	
52	藤田	半兵衛		大垣人	囲碁	
53	下里	与六郎	号延平	大垣人	古学・和歌	
54	大矢	玉秀	号成惟館	多芸郡安久人	画工	
55	花王	院	家本日本惣正面席紫幕 芍薬名花惣計百林	本巢郡生津郷	花道	臨龍館一円
56	百々	権九郎	号棟園	高田人	書者	
57	久世	作兵衛		大垣人	皇国学	光苞
58	高井	松亭	蘭兼学	市県郡小倉人	医師	
59	加野	平作	能鞍	黒俣人	乱舞	
60	後藤	養元	兼内外科	山県三輪人	医師	
61	吉川	宗元	蘭兼学	大垣人	医師	
62	角田	春策	号錦江	笠松人	学者	
63	石原	龍郷	内科	安八郡下宿人	医師	
64	鶴崎	山人	号一松亭	安県郡長良人	俳諧・画工	
65	早野	菊右衛門	家元前国会頭職	不破郡檜人	花道	花菟斎青幽
66	富田	藤十郎	家元当国会頭職	不破郡表佐人	花道	鳳竹軒一声

教育史フォーラム 第12号

67	三枝	軒如龍	家元前国会頭職	安破郡楡又人	花道	
68	棚橋	五良左衛門	家元国准会頭職	楡又如龍男	花道	三枝軒鶴州
69	丹羽	与三右衛門		丹羽氏祐男	蹴鞠	
70	梅ノ坊	一枝	家本国目代職	中嶋郡一ノ枝奥雲寺見端	花道・仏学	
71	一行房	栲樗	家本国協会頭職	多芸郡附附奏法寛寺	花道	
72	柳瀬	賢治郎	家本正面席	不破郡小寺人	花道	松蔭亭千歳
73	河村	忠右衛門	号内郷	上有知人	古学・和歌	
74	加藤	小三郎		方県郡芦数人	囲碁	
75	高橋	友吉	号杏村	安八郡神戸人	書画	
76	谷	治良八	水野民与門号幽斎	大垣人	算術	関流
77	服部	因叔	御膳所東武人	厚見郡防江崎産	囲碁	
78	宗匠	友左坊	獅子門九世	美江寺駅人	俳諧	
79	組田	治右衛門	能経東武服部氏門	加納人	乱舞	
80	金森	嘉兵衛	号煙波魚人	大垣人	以詩文自娛	
81	五大坊	山甫	諸国宗匠職	南宮衆從十如院	生花	植松殿方松月堂古流
82	氏家	久之進	当国准惣司職	石津郡牧田人	生花	翠篁亭亀文
83	白玉軒	尹斎	当国司職 俳諧号鳴笙楼文峰	南宮杜司不破伊勢守	生花	翠篁亭亀文
84	五井	順吉	諸国漂泊司職	石津郡牧田人	生花	東籬園芳菊
85	広江	彦治郎	永貞流元祖広江 彦藏永貞男	厚見郡比乃通人盤城藩	算術・運氣 曆術	関流
86	江崎	策十郎		厚見郡次木人	囲碁	
87	柴山	司	号老山	大野郡附斐士	学者	
88	渡辺	助左衛門		芝北方人	蹴鞠	
89	田代	半左衛門		安八郡神戸人	囲碁	
90	遅染庵	梅二	正門宗匠	大野郡附斐人	俳諧	
91	井上	源右衛門	家元日本惣正面席	本巢郡附積人	花道	玉正軒秀翠
92	山田	文庵	内科	上有知人	医師	
93	山中	春洞	号天倪	今尾人損斐住	学医	
94	三嶋	為信	兼内外科	羽栗郡不破一色人	医師	
95	小森	嘉七	家元国会頭職 応樹軒其台	大垣人	生花	初乃汲浄斎男
96	西川	満阿	号叟樹庵	岐阜人	雑家	
97	牧	善助	住京師号意斎	本巢郡文殊産	儒学	
98	河瀬	東八郎	号孝製翁友明	大野郡寺内産古人	孝学家	孝宦五十八代相承

ファンステーンパール：『三野人物考 和合編』

99	棚橋	忠蔵		山県郡松尾人	好軍記雑書 以風雅為樂	
100	川出	龍山	寓居名府	高須人	学医	
101	渡辺	鼎	号聖溪	本巢郡文殊人	医学・経術・詩文	
102	河瀬	三郎助	号養老子友継	寺内東八郎友明男	孝学家	
103	岩間	蔵六		岐阜人	御家流筆道	
104	棚橋	新五右衛門		山県郡松尾武門	積徳為常政道 好画自染風雅	
105	杉山法橋	三花水斎	鷹司御殿下家 御活花御筒御用高名ノ人	山県郡高富住	活花並筒宗匠家	千流 御室御所御配下
106	久保田	千条斎	准家	大垣人	活花	千流
107	松下	堂	准家並筒ヲ善ス	高富武門	活花	千流
108	吉田	藤一郎	号東堂	加納藩人	儒学	
109	原	松寿斎	免許	郡上白鳥人	活花	千流
110	安田	篤四郎	免許	多芸郡横曾根人	活花	千流
111	小川	風鐘斎	免許	安八郡神戸人	活花	千流
112	吉田	子鳳斎	准免許渡諸流花道執心也	芝北方人	活花	千流
113	玉	簫斎	流補	方県郡丁越僧	活花並筒	千流
114	丸山	道男	内外科 父周精	各務郡岩田人	医師	
115	水谷	直次郎	名直方号菊泉	安八郡今尾人	雑家	
116	林	要人	内科	大野郡古橋人	医師	
117	緑林寺	慈遠	算術律師忍澄男号不染	海西部鹿野	書並鉄筆	
118	小林	順道	蘭兼学	今尾藩人	医師	
119	伊藤	一元	内科	芝松人	医師	
120	後藤	機	住浪花号春草	安八郡森部産	儒学	
121	太田	重右衛門		羽栗郡竹ヶ鼻人	将棋	
122	河田	熊碩	蘭兼学能産術	方県郡城田寺邨人	医師	
123	組田	三好		加納人	将棋	
124	川崎	平右衛門		竹ヶ鼻人	将棋	
125	永田	佐吉		竹ヶ鼻人	孝養為常積徳 世人称仏佐吉	
126	小川	伝右衛門		竹ヶ鼻人	将棋	
127	渡辺法橋	玄安	近衛殿代々御目見	大野郡揖斐南方人	医師	代々 勅法橋
128	河合	藤兵衛		関人	将棋	

教育史フォーラム 第12号

129	林	忠左衛門	山井左近将曹基寿学	高須藩人	和歌 笛	本居春庭学 山井左近将曹基寿学
130	渡辺	文礼	内科号橋堂	安八郡今尾	医師	
131	伊東	忠右衛門	前渡坪内家武門	厚見郡今峰産	算術	
132	佐野	善七	執心人	石津郡本阿弥新田	将棋	
133	杉山	千代三郎	少年十五歳二而進段	神戸人	囲碁	
134	星野	真省	内科	芝北方	医師	
135	澤田	玄良	内科	各務郡須衛人	医師	
136	鈴木	六蔵	本居家門	高須人	和歌	
137	渡辺	治輔	東武本田三良右衛門 皆伝号精均	高須人	算術	関流
138	渡辺	治右衛門	本居春庭学号尋	渡辺治輔男	和歌	
139	桑原	順庵	内科兼外科眼科号桑林	不破郡隣野人	医師	
140	石黒	甚六郎	松海軒三鳳	各務郡隣沼三ツ池人	活花	御家元
141	後藤	一夢	号松寿林舞鶴亭	各務郡芥見	俳諧	
142	後藤	重良右衛門	号古松軒梅月	後藤一夢男	活花	美笑流
143	蓮台寺	隠納	号竹亭	海西郡松ノ木	詩文雑学 好生花茶事	
144	佐竹	元順	世々療傷寒温疫	高須人	医師	
145	神谷	三一郎	漢蘭兼外科	山県郡彦坂人	医師	
146	救住花園殿	准大納言黙庵	別号松翠洞	山県郡岩村法雲山主	筆道	
147	福富	因幡正		大野郡伊久良神主	神道	
148	内田	専庵	蘭兼学内科	安八郡北方人	医師	
149	福田	博道	内科	大野郡古橋人	医師	
150	林	丈助	住名府	芝北方産	蹴鞠	
151	海堂	女史	鶴翁門	高須人川出氏	画工	
152	山田	安碩	眼科	大垣人	医師	
153	大澤	杏林堂		山県郡福富人	医師	
154	伊藤	左六郎		下高田人	書家・歌道	
155	西脇	雅秀	号松声館	多芸郡竜泉寺人	画工	
156	里邨	良策	眼科兼内科	芝北方人	医師	
157	柏淵	三七郎		高田人	歌学	
158	山口	玄篤	号東臈	安八郡大牧人	医師	
159	西脇	蘭溪	号陶々館	多芸郡竜泉寺人	画工	
160	林	坊中	古疾医	安八郡神戸人	医師	

ファンステーンパール：『三野人物考 和合編』

161	後藤	文敬	内科	武儀郡下有知人	儒医	
162	天野	順貞	浅井家高弟	加茂郡飯田住	医師	
163	足立	荘左衛門	名久景号松石	今尾人	和歌・詩文	
164	岡崎	蘆菴	号回春亭	厚見郡比通住	医師	
165	伏屋	九良兵衛	号緑雲	羽栗郡伏屋村武門	軍学	南木流
166	龜山	良省	内科	関人	医師	
167	宮部	玄泰	能温疫療	池田郡野中人	医師	
168	大野	玄通	内科号橋井堀	各務郡桐野住	医師	
169	万福寺	寛音	称如然房	墨俣駅	仏学	
170	野川	信右衛門	宗匠家号松琴斎一和	大野郡敷屋住	花道	遠州流
171	後藤	祐造	外科	岐阜住	医師	
172	服部	幸右衛門	広江永貞門	厚見郡西鄙人	算術	関流
173	名和	輔之進	小兒科兼痘瘡眼	本巢郡十五条人	医師	
174	大平	伊兵衛	有名家聞	安八結人	好憂菊園	
175	川瀬	鷹之輔	少年十六歳進段	安八郡古宮人	囲碁	
176	宮嶋	善兵衛	免許五段	岐阜人	将棋	
177	山田	承民	内科外科奇術号鶴雲堂	岐阜北高木	医師	古方
178	順勝寺		号錦鷗道人	加納城東下川手村	画工	
179	小川	昌益	兼内外科	大野郡大衣裴人	医師	
180	佐藤	捨蔵	東武住号一斎	岩村人	学者	
181	藤掛	珪八郎	眼科	可児郡兼山村住	医師	
182	福寄	又兵衛	大溪庵部童	可児郡錦織武門	俳諧	
183	岡崎	玄兆	傍正石菴愛玩玉石 古鏡古雜物類 号曲錦館又錦鏡堂	三宅邑	内科	
184	安田	弘	南紀萃岡門号東洲	安八郡津邸	医師	
185	川合	襄平	号春川	高洲産	紀府講室	
186	夕顔	葺了西		御園人	和歌	
187	小嶋	一学	外科	羽栗郡牛子人	医師	
188	日比野	立右衛門		大垣人	算術	関流
189	浅野	兵部	号青雲斎雅兆	各務郡長塚神主	俳諧	
190	緑亭	員久	六樹棋門人	岐阜	狂歌	
191	谷	理九郎		池田郡市橋村住	好筆刻倭漢名石 古銭古鎗三代	
192	加藤	佐蔵	広江永貞門	厚見郡東本庄人	算術	関流

教育史フォーラム 第 12 号

193	邨	正激	蒼松園号蘆湖	西郷人	以詩及書自為樂	
194	満口	遷江	号政視	芝此方社司	神道	
195	大橋	朝秀	霞彩館	大垣人	画工	
196	佐良木	素元	号倚松庵文可	池田郡六ノ井人	俳諧	
197	五十川	邦太郎	号自然斎	池田郡六ノ井人	医師	古今折中
198	山中	金兵衛	号雨龍軒	芝北方人	相学	
199	浦山	藤七郎	号楽亭	大垣人	書・篆刻	
200	篠田	昌意	内科	各務郡芥見人	医師	

註

- 1 本稿中の図二点は、国会図書館所蔵『三野人物考 和合編』（請求番号 211 - 81）による。
- 2 翻刻は、岐阜県編『岐阜県史』（史料編 近世 8、岐阜・太洋社、1972、693 - 696 頁）にあり、複製は森銑三・中島理壽編『近世人名録集成』（第 2 巻、勉誠社、1976、471 - 483 頁）に所収されているほか、冊子仕立てのものも発行された（岐阜県郷土資料研究協議会編『三野人物考 和合編』岐阜・岐阜県郷土資料研究協議会、1982）。
- 3 森銑三・中島理壽編『集録書解題』『近世人名録集成』第 5 巻（勉誠社、1976）38 頁。
- 4 中野三敏「江戸の人名録（5）」『日本古書通信』第 942 号、2008、12 頁。
- 5 この一覧表に掲載されている版本のどれにも刊記が付いていないため、掲載順番は、必ずしも出版順を意味しないことを断りたい。とりあえず、所収人数を基準として掲載し、同人数の場合は適当に並べたのである。また、国文学研究資料館が運営する「日本古典籍総合目録データベース」によると、筆者が確認したもの以外に、「無窮会図書館」と村野時哉の「村野文庫」にも『和合編』の版本が所蔵されているが、前者に関しては現在この版本が紛失されている状況であり、後者は文庫自体の行方が不明とされている。
- 6 【D】以降の版において、「覚明寺智幢」の号のところは「法話弁才人」から「号松葦」へ改刻、【E】以前の「花王院」には号のところが付されていないが、【F】以降に「家本日本惣正面席紫幕」とある。同じく【F】以降の「吉川宗元」の住居のところは、「大垣人藩」から「大垣人」へ（ただし、【G】を除いて）、また「宗匠莫左坊」という人物が「宗匠友左坊」へ改められた。
- 7 これは、【D】以降に、「常在寺山澤」は「久世吉良助」に、「船橋願誓寺」は「久世作兵衛」に、「三花水斎法橋」は「金森喜兵衛」に改刻。また、【F】以降に、「田結宗伴」が「井上源右衛門」に、「鍋田清三郎」が「三嶋為信」に改刻。また【G】だけだが、「宮部玄泰」が「額額仁造」に、「岩間蔵六」が「古山利助」に、「棚橋忠蔵」が「桂菴嵩左坊」に改刻。また【G】には、「船橋願誓寺」は「久世作兵衛」に改刻されていない。
- 8 『近世人名録集成』第 3 巻、560。
- 9 『近世人名録集成』第 4 巻、305。
- 10 そもそも「和合編」という副題が、孝を重視している立場を表している。というのは、『三野人物考 和合編』にはそれに関する記述が見当たらないが、たとえば河瀬友山がその後に出版している『孝学食慎録 和合編』（1847 年刊）では、「孝是和合の総体」や「孝学は諸道を引立る万法和合の大道なり」（23 丁オ）と明記されている。
- 11 また、河瀬友山が弘化四年（1847）に『孝学感養記 和合編』という題名で、新作の「孝学感応録」と「孝養門」を合わせて出版した事実において、「孝養門」へのこだわりが見受けられる。

ファンステーンパール：『三野人物考 和合編』

-
- ¹² 水火天神所蔵の家系図による。史料の閲覧と撮影を快くご許可くださった孝学家の方々にお礼を申し上げます。
- ¹³ 施印の位置づけについては次の拙稿を参照。ファンステーンパール、ニールス『『丙午縁起』解題・翻刻—近世における施印伝播の一例として』『書物・出版と社会変容』第14号、2013; Van Steenpaal, Niels. “Taming the Fire Horse: The Free Distribution of Anti-Superstition Pamphlets in Early Modern Japan,” *East Asian Publishing and Society*, vol. 5:2, 2015.
- ¹⁴ 詳しくいえば、「久世作兵衛」は久世友輔の子であり、「久世吉良助」は久世順矣の子。順矣は友輔の弟（大垣市編『大垣市史』中、大垣市役所、1930、322、344頁）。
- ¹⁵ 廣庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』（世界思想社、1998）187頁。

【附記】

本稿は2015年度グラフィック文化に関する学術研究助成「日本近世の「施印」に関する基礎研究—国内・国外調査と事例研究」（公益財団法人DNP文化振興財団）による成果の一部である。